

# 令和7年度 校内研修について

## 1 研究主題

### 《 研究主題 》

#### 感じ・認め・つなぎ、学び合う子どもの育成

##### — ICTを効果的に活用した主体的に生きる人づくり—

## 2 研究主題設定の理由

### (1) 社会的な背景から

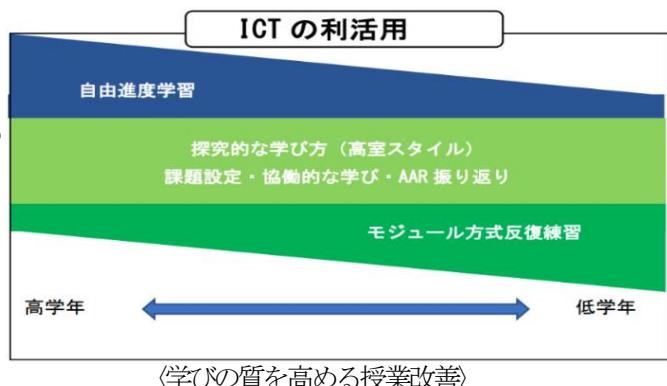
今日、児童を取り巻く社会は、情報化やグローバル化が加速度的に進み、それに伴って、人々の価値観や生き方が多様化し、急激な変化を続けている。さらに、今後、グローバル化が進展する中で、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題となる。また、このような予測困難な時代において、未来の社会を予見しながら問題を解決していくためには、学校教育で得た知識だけでなく、それ以後に獲得する新たな情報や知識を基盤に新しい答えや価値観を生み出すことのできる資質・能力が必要とされている。

このように主体的に学びに挑戦し続ける子どもを育てるためには、一層きめ細かく子どもの実態を把握し、授業に臨むことが大切である。また、子どもたちが主体となって興味や関心に応じた課題を深める価値のある課題を設定し、多様性や協働性を發揮し課題解決に取り組むとともに、個に応じた学びを提供し、一人一人が成果を実感できるような授業改善が求められている。ICTを効果的に活用することがあたりまえとなりつつある現在、ICTを活用し自ら学び続ける人を育て、子どもを主語にした学校教育の実現が求められる。

### (2) 児童の実態・学校課題から

本校の主な教育課題は学力の向上と、生徒指導・特別支援教育の充実である。小規模校で1学年20名程度の児童数ではあるが、学力の二極化と特別な支援を必要とする児童の増加が顕著に見られ、一人一人の学びを保障する観点からも、指導方法の工夫、改善が求められている。この課題を解決するには、主体的に学びに挑戦する子どもを育てることが求められる。そのためには、ICTを適切かつ効果的に活用して、個別最適な学びと協働的な学習を充実させるとともに、主体的・対話的で深い学びを通して、複雑で予測困難な社会を生き抜くために必要な資質能力を育成することが肝要であると考える。

本校では、令和2年、3年、道徳の研究を通して「感じ、認め、つなぐ」の学習スタイルを模索し、各教科においても定着を図る工夫を行い、道徳的な実践力を育む教育に取り組んできた。また、令和4、5、6年には、タブレット端末の日常的な持ち帰りを実施するとともに、ICTを効果的に活用し、探究的な学びとAARサイクルの振り返りを意識した高室スタイルの授業（探究的な学び方）を推進してきた。その結果、令和6年度の全校生アンケートでは、「勉強が楽しい」の質問で、88%が肯定的な回答をしており、主体的に学ぼうとする児童が多いことが本校の強みである。また昨年度は、ICTを活用した自由進度学習やモジュール式反復練習にも挑戦し、個別最適で協働的な学び方の習得や学力向上をめざした。



## 3 研究主題について

「感じる」とは、様々な人・もの・こととの関わりの中で相手の気持ちに思いをはせ、言葉だけでなく、表情や行動など目に見えることから目に見えないことを想像したり、考えたりして相手のことを知ろう・分かろうすることである。全ての学びはここから始まる。

「認める」とは自他の違いやお互いのよさに気付き、互いに相手の考えに共感することで、まず、しっかりと聞いて理解し、相手の考えを取り入れたり、自己の考えを確かにしたりすることである。「認める」ことで自分の行動や学習を振り返り、自他の違いやお互いのよさに気付くこと、また、自分と違う考えも取り入れ、多面的・多角的に考え、学びを深め、新たな考えを創造することができる。

「つなぐ」とは自他の考え方や事象、生活を関係づけて考えることで、高め合ったり、広げたり、確かにしたりすることである。学んだことを生活の様々な場面と関連づけて活用することで、既習や他教科等での学び、友達の考え方、あるいは、自分の心のものさしや経験等と関連づけることができ、児童が自己の生き方について考えを深め、学び合うことができると考える。

「ICTを効果的に活用した主体的に生きる人づくり」とは、情報活用能力の育成を計画的に行うことで、児童にとって、タブレットが文具の1つとなり、ICTを主体的・日常的に活用しながら学びを充実させる子どもを育てることである。

#### 4 育てたい資質・能力について

見通す力	自ら考え方判断したり、生活や学習の中で発生した疑問を次の学習に生かしたりする力
生かす力	学んだことを生活の中に生かし、実践することができる力
みがく力	自分で解決したり、ペアやグループなど協働する中で解決したりする力
もとの力	学習の基礎となる知識や技能を反復練習により定着させる

#### 5 研究の視点と内容

- (1)高室スタイル（探究的な学習）の授業の在り方・・・三觀小研学校給食研究発表会 学級活動の実践
- ICTの効果的活用
    - ・ 児童が解決したくなる教材との出会い方の工夫、一人学びや交流場面の学びを深める工夫（学習評価の工夫、デジタルノートの活用、学習履歴の蓄積、情報モラル教育等）
    - AARサイクル・・・A（見通し）A（行動）R（振り返り）
      - ・ 解決の見通しを立てて、まずは行動し、修正、改善を繰り返す。
    - 自己選択、自己決定（自由進度学習）
      - ・ 課題、過程、形態等を自己調整し、自分のペースで自分のスタイルで主体的に学ぶ。

(2)モジュール方式反復練習

    - ドリルタイムの活用 → 朝の15分間（火、木、金）で脳を活性化
    - 音読、視写、計算の基礎・基本の反復練習 → 読み書き計算の基本的な力を身に付けたり、集中力を養ったりする。
    - 授業の始まりや終わりでのフラッシュドリル → 基礎基本の定着

(3)1人1台端末の持ち帰りによる家庭学習や、授業と関連した取り組みの工夫

    - 連絡帳や家庭学習での活用 → ICT活用による家庭学習の工夫、予習や復習の充実
    - 学校と家庭を繋ぐ役割 → 授業や学習の様子の可視化

(4)教科横断的なカリキュラムマネジメント

    - 総合的な学習の時間の見直しと計画的で確実な実践
    - 食に関する全体指導計画の作成と実施
    - 特別活動（学級活動）の年間計画の見直し